

国策の「宣伝者」として

～アナウンサーたちの戦争（後編）～

メディア研究部 大森淳郎

前編では「淡々調」の誕生と、日中戦争期におけるその位置づけを見てきたが、後編では「淡々調」が「雄叫び調」に転換してゆく過程を考察する。

「帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」

この、太平洋戦争の開戦を告げる館野守男アナウンサーによる臨時ニュースこそが、いわゆる「雄叫び調」が誕生した瞬間であると、当時から主張されていたし、今日でも定説となっている。しかし、これが事実ではなく、いわば伝説にすぎなかったことは開戦前のアナウンサーたちの発言を注意深く見てゆけばすぐにわかる。彼らは日米開戦の危機が迫った1941年夏以降、すでに「淡々調」を否定し、新しいアナウンス理論「雄叫び調」を模索していたのである。「雄叫び調」の誕生をめぐるのは、なぜ、事実とは異なる伝説が必要とされたのだろうか。

本稿では、「雄叫び調」が誕生する背景には軍からの強い要望があったこと、アナウンサーたちにとってそれは受け入れがたいアナウンスであったこと、そして軍が要望する文字どおりの「雄叫び調」とは異なる「雄叫び調」を生み出したことを論証する。軍の要望を内面化する、そのためにこそ伝説は必要だったのである。

「雄叫び調」は軍が求める「突撃ラッパ」のようなアナウンスではなかった。館野守男は「雄叫び調」を「情熱によって国民を捉え、其の感情を結集し、組織し、之を一定の方向へ動員」するアナウンスと定義した。それは、どんな成果を得たのだろうか。

2. 「雄叫び調」の時代

「淡々調」の敗北

1941（昭和16）年7月、日本軍は南部仏印への進駐を開始した。アメリカは対日石油禁輸を決定、危機感を抱いた日本軍首脳の間では対米開戦論が浮上する。安齋義美アナウンサーの論考「新しい出発のために」が雑誌『放送』に掲載されたのは、その翌月のことである。未曾有の危機を前に、アナウンサーたちは彼らのアナウンス理論について再考を迫られていた。

まず安齋は、アナウンサーの重鎮らによって刊行されたばかりの「淡々調」の体系的な理論書『アナウンス読本』を「さし迫った現実が厳しく要求しているものと必ずしも合致するものではない」と断じ、次のように続ける。

その中のあるもの——例えばわれわれが一応の目標としてきた所謂「淡々たる話しかけ方」は、この烈しい現実の前に、或る場合に於て著しく魅力を失いかけたアナウンス形式になろうとしている¹⁾。

アナウンサーたちが築き上げてきた「淡々調」に対する公然たる批判の始まりだった。

安齋によれば、研究会の場やアナウンサー仲間の間では、かねてから「淡々たる話しかけ方」を乗り越えようと「火のように論議」されてきた。その結論は「アナウンサーは、もっと、いゝ意味のプロバガンディスト乃至アジテーターにならなければいけない」ということだったとし、次のように決意を述べていた。

われわれは、今宣伝下手であるということが国家の前進のために一つの負担になっているということをはっきり認識してそれを改めるよう努めなければならない。(中略)とにかく今直ぐわれわれは新しい出発をしなければならない²⁾。

「淡々調」を否定し乗り越えようとする声は、アナウンサー・グループの外からも挙がっていた。報道部の中澤道夫は安齋の「新しい出発のために」への支持を表明し、次のように主張している。「国民すべてが困苦を共にし、欠乏に耐え、新しい生活を確立して、祖国の運営を切りひらこうとしている時、そうした生活意識、国民意識は、単なる言葉以上に、力として、自らアナウンスにもり込まなければならない筈である³⁾」。

では、どうすればよいのか、中澤はこう続ける。

声を強くし、調子を張るというような表面的なことではないのは、断るまでもあるまい。それでは、単に、技巧の点に終始することになってしまうであろう。私の言いたいのは、アナウンサーはもっと自分という人間を出していいのではないか、ということである。

アナウンサーの主観を排せという「淡々調」が大阪で生まれてまもないころ、東京の業務課長・國米藤吉がそれを批判して「魂に徹する活きたる人間の声」こそが聴取者に届くはずだと主張していたことは前編で述べた。「アナウンサーはもっと自分という人間を出していい」という中澤の主張は、その國米の主張とほとんど同じものに聞こえる。アナウンス理論は、ぐる

りと一回りして「淡々調」以前に戻ったかのようだが、そうではない。アナウンスに「人間」を出す、という意味では國米の論も中澤の論も同じであるが、2人が使う「人間」の意味はずれている。國米における「人間」は個々のアナウンサーの経験に根ざした知識や感情の総体であり、アナウンスの「真善美」の源泉とされていた。一方、中澤の「人間」は危機に直面する国家が求めるただ一種類の「人間」、すなわち「欠乏に耐え、新しい生活を確立して、祖国の運営を切りひらこう」とする「人間」でなければならなかった。アメリカとの戦争という危機が迫る中で、再び「人間」が形を変えて強調されることになったのである。

新しいアナウンスへの転換を求める声は、個人的な意見の表明というレベルを超え、日本放送協会の臨時非常対策委員会でも議題にのぼっていた。臨時非常対策委員会は、国際情勢の緊迫を背景に「予メ周到ナル具体的計画準備ヲ樹立⁴⁾」することを目的として1941年9月に設置されたもので、委員には担当理事以下、報道部長、業務局次長らが名を連ねていた。

1941年10月22日に開催された会合の記録を見ると、そこでは「非常状態ニ於イテ放送ノ使命ヲ完全ニ遂行シ国策ニ完全ニ協力シ得ル万全ノ準備ヲナスコト」を根本方針としたうえで、「対策ヲ樹立スベキ具体的項目」が挙げられていた。その中の1つに「『アナウンス』方式の再検討」があったが、再検討が必要とされる理由は次のようなものだった。

非常時体制ノ進展ニ従イ自ラ「アナウンス」方式モ変更セラルルヲ当然トス⁵⁾。

非常事態に際し、国策に完全に協力するた

めにはアナウンスの方法を変えなければならぬことが、臨時非常対策委員会の名において主張されていたのである。

このあと、「アナウンス方式」について、放送局全体の問題としてどのような「再検討」が行われたのかをトレースできる資料はないが、安齋や中澤が主張する方向、すなわち「淡々調」を否定しアナウンサーの主観を前面に押し出す方向に向かっていったことは間違いない。

太平洋戦争開戦の直前、1941年11月、岡本正一アナウンサーは、『放送研究』誌上の1ページコラム「アナウンサー室」で、新しいアナウンスが生まれつつある状況を「淡々調アナウンスの敗北」と言い切り、今や「溢れる日本人の性格を素直に忠実に、そして最も強烈に表現すべきだ」と主張していた。そして言葉だけに終わらせず、実践に移す必要を強調して次のように宣言している。

「アナウンサー室」は此処に全アナウンサーの名に於いてそのことを誓いたいと思う⁶⁾。

アナウンス理論をめぐる議論は「淡々調」の否定一色だった。それを擁護する声を『放送研究』誌上に見いだすことはできない。

開戦と「雄叫び調」

1941年12月8日午前7時すぎ、ラジオは太平洋戦争の開戦を告げた。

臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、12月8日午前6時発表。帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。帝国陸海軍は、本8日未

明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。今朝、大本営陸海軍部からこのように発表されました⁷⁾。

この館野守男アナウンサーによる臨時ニュースについて、開戦前からアナウンスの「新しい出発」を主張してきた安齋義美は次のように評している。

怒鳴り過ぎると人は言うかも知れない。(中略)それはアナウンサーという一つの職業人のアナウンスというよりも、むしろ、日本人一般に還元される国民感情、日本人としての感情の、自然の流露がただ、あゝいう表現形式をとって現れたのだとさえ言えるものだった。言うまでもなく当然のことであり、正しいことである⁸⁾。

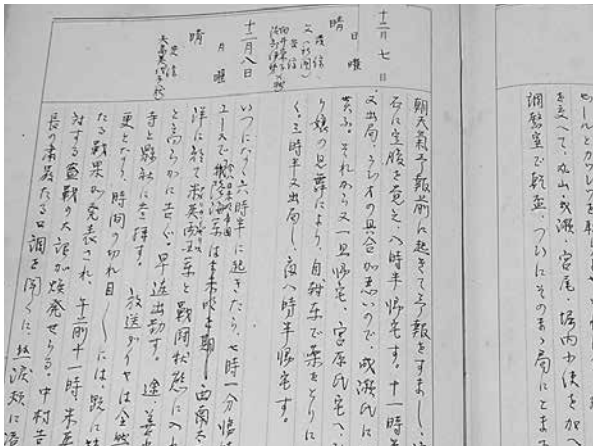
アナウンサーたちは「淡々調」を乗り越えるために太平洋戦争開戦前から「火のように論議」してきたが、開戦の臨時ニュースは、その論議が、いわゆる「雄叫び調」として結実した瞬間だった。

ところで、館野が読んだ臨時ニュースは録音によって今も聴くことができるが、安齋が言うように「怒鳴り過ぎ」てなどはない。緊張がみなぎってはいるが、むしろ抑制が効いていると言ってよい。当時、プロの耳にはどう聞こえていたのだろうか。長野放送局アナウンサーの立澤正雄たつざわまさおの日記を見てみよう(写真1)。

昭和16年12月8日

いつになく六時半に起きたら、七時一分臨時ニュースで「今八日未明、帝国陸海軍は、西太平洋に於てアメリカ、イギリス軍と戦闘

写真1 開戦の日の立澤正雄日記



NHK放送文化研究所蔵

ことが要求された。宣伝者たるには、第一に情熱の人でなければならない。アナウンスは人に訴え人を説得しようという劇しい強調の精神を持たなければならない。強調によって聴取者に訴え、情熱によって国民を捉え、其の感情を結集し、組織し、之を一定の方向へ動員しなければならないのである⁹⁾。

これこそが「雄叫び調」というアナウンス理論の核心だった。アナウンサーの情熱によって国民を戦争協力に動員する「雄叫び調」は、緒戦の勝利を伝えるにふさわしい

アナウンスとして定着してゆくことになる。

放送員再教育

長野放送局の立澤正雄も、先輩たちが読む戦況ニュースに耳を傾けていた。しかし立澤の日記には、新しいアナウンスへの驚きや戸惑いよりも、ニュースを読む機会すらない自分の境遇を嘆く記述が目立つ。戦時非常態勢のもとで、ラジオのローカル放送枠は縮小されていた。

昭和17年1月12日

諸先輩のはちきれのようなニュース・アナウンスが、今や全日本を沸立たせているのに、地方局アナウンサーの悲哀は毎日、連絡を聴いて番組のガリ版書きが唯一の仕事である。

昭和17年2月25日

大東亜戦二ヶ月余にして、比島、マレー我傘下に入り、ビルマと蘭印も袋の鼠と成る。次いでは印度か豪州か、はた米本土か——。放送第一線に立つ者、べんべんとして閑地に惰眠をむさぼるの嘆、久しきに亘る。勇躍

状態に入れり」と高らかに告ぐ。早速出勤す。(中略)放送ダイヤは全然変更となり、時間の切れ目切れ目には、既に^{かっかく}赫々たる戦果が発表され、午前十一時、米英に対する宣戦の大詔が渙発せらる。中村告知課長の肅然たる口調を聞くに、熱涙頬に溢るゝをぬぐいもあへず、時に正午にして、近くの勤人たちも城山のスピーカーの下に集る。

臨時ニュースは、開戦を高らかに告げたのであり、宣戦の大詔は肅然たる口調で朗読されたのである。「淡々会」の立澤の耳に開戦の日のアナウンスは、その内容のみならず調子においても、やはり特別のものに聞こえていた。それは立澤が研修でたたき込まれてきた、アナウンサーの主観を排して読む「淡々調」とは別のものだった。

臨時ニュースを読んだ当の館野は、「新しき放送」は「時局の要求」から生まれたのだとし、次のように記している。

アナウンサーが「宣伝者」として生まれ変わる

南進して皇恩にむくゆるの機を待つことや切なり。

立澤は、日本軍の進撃を伝える東京発のニュース・アナウンスを「はちきれるような」と形容している。「淡々会」の立澤には、自分が教えられ、実践してきたアナウンスとの違いは歴然としていたことだろう。だが、日記には批判も称賛も記されてはいない。立澤にとっては、自分が読むことのないニュース・アナウンスのあり方よりも、とにかくマイクの前に立ちたいという願望のほうが切実だった。自分も躍進する日本軍の姿を伝えたい。東京への転勤がかなわないのならば、南方の占領地に行ってもいい。立澤の胸には、そんな夢が膨らみ始めていた。

だが、その夢がかなうのはまだ先のことである。日記には、日本軍の快進撃の素描と、家族や同僚との日常の記録が、それこそ「べんべんと」続くが、ある日、長野放送局にも、東京のアナウンス・グループからの新しい風が吹き込んできた。

昭和17年6月29日

今日から大平係長、一日より十日迄AKの放送員再教育研修に出かける。

放送員とは、1942年4月に定められたアナウンサーの新しい呼称である。英語を通して「米英の思想が文化が生活が、我々の間に食い入っていた事に慄然と¹⁰⁾し、日本語を使うことになったのだという。その放送員に対する再教育研修が行われたのは1942年7月のことだった。対象は全国の中堅アナウンサー35人、その中に立澤の上司である大平伊太郎も含まれて

写真2 放送員再教育研修（1942年7月）
訓示を聴くアナウンサーたち



『放送研究』1942年8月号グラビアより

いた。

研修は東京の放送会館で10日間にわたって実施された（写真2）。告知課長（現在のアナウンス室長）・松隈敬三は放送員再教育の目的を「戦時下に適応する新しい心構えの確立¹¹⁾」としていた。

研修の間には、アナウンスの実習も行われたが、中心は放送局内外の講師による講話だった。「アナウンス技術の向上も、固^{もと}より必要であり、これが為にも考慮する所はあったが、アナウンス技術も亦、放送員各自の心構えを離れてはあり得ないものであることを、忘れてはならぬ¹²⁾」いからだった。

太平洋戦争に対応した新しいアナウンスは、アナウンサーの主観を前面に出すアナウンスである。そうであれば、アナウンサーの主観こそが時代にふさわしいものでなければならない。放送員の再教育は、そこから導き出される当然の帰結だった。変わるべきは、アナウンスの技術ではなく、アナウンサー自身だった。

『放送研究』1942年8月号に掲載された松隈の「放送員再教育報告」から、主な講話とその説明を以下に抜粋する。

「真の日本人に還れ」佐々木総務局次長
米英的思想を払拭、真の日本人に還元し、
マイクを通じて国民の志気昂揚に務むべきことを強調さる。

「何と戦うべきか」

国民精神文化研究所員 伏見猛彌

米英の我が国に対する思想的謀略、特に教育に潜入せる計画的謀略を暴露し、真の日本人として再発足すべき旨、強調さる。

「思想戦とユダヤ問題」友安業務課長

ユダヤ人の世界歴史に対する関係を明らかにし、この問題に対する研究の要を力説さる。

「放送と文化」

情報局第五部第三課長 井上司朗

文化の定義より説きおこして、日本の文化は勤皇文化であり、放送員は勤皇放送に邁進せよと強調さる。

「放送と国民運動」

大政翼賛会宣伝部副部長 川本信正

放送と国民運動との密接な関係を説き、放送員のこれに対する責務の重大なるを明らかにさる。

「アナウンスの変遷」河西講演部副部長

アナウンスの初期よりの変遷を説明され、現在の放送員のアナウンス態度を批判し、放送員の社会全般にわたる不断の勉学を奨めらる。

研修の間、このような講話が連日、続けられた。昼食は教室でうどんとパンのみ、食事中は静肅が求められた。強歩による心身の鍛練、団体行動による規律の訓練を目的に、日光方面への1泊2日の合宿も組まれた。それは確かにアナウンサーの再教育と呼ぶにふさわしいものだった。研修を終えた1人のアナウンサーは、こう記している。

心の中で国體の尊さに頭を下げようとせず、口先のみ国體を讃える千万語を吐こうとも何ら人を動かす力はない。心とアナウンスとウラハラになっている人にその放送を信じさせ、尊敬させることはできない。自分自身の心が既にアナウンスに背を向けているからである¹³⁾。

心とアナウンスが裏腹ではいけないという主張自体にはうなずけないわけではない。花を見て「美しい」と言うとき、心から美しいと思って言うほうが伝わるだろうからだ。再教育によってたたき込まれたのは、国體を尊ぶ「心」そのものだった。

立澤正雄の戸惑い

長野放送局を代表して放送員再教育を受けた大平は、何を持ち帰ったのだろうか。立澤の日記には次のように記されている。

昭和17年7月14日

大平氏東京より帰り来る。アナウンスも淡々調から宣伝調アナウンスへ変転せる由なり。

この時期、開戦前後に中止されていたローカル・ニュースも一部復活していた。大平が直接、東京から持ち帰ったアナウンス理論の変更方針は、立澤にとって重要な情報だったはずだ。だが、日記の記述は人ごとのように素っ気ない。

「淡々調」から「宣伝調」（いわゆる「雄叫び調」）への転換は、ローカル局の新人アナウンサーたちの^{あずか}与り知らないところで決まったことだった。立澤たちが学んだアナウンス理論は「伝達者の主観を交えない、淡々として而も上

品な読み方」であり、そうすることで「隠微のうちに人の心をつらえ、知らず知らずのうちに人の共鳴を獲、かくして国策を宣伝し民心を統一」することができるはずだった。立澤自身、日記に「自己の主観によって素材をゆがめたり、小才をろうしたりすることは、絶対に排撃される」と記していた。そうなのに、大平係長が東京から持ち帰ったのは「宣伝調」というほとんど真反対のアナウンスへの転換方針だった。

自分たちが研修所でたたき込まれたのはいったい何だったのだ——。

「淡々会」の立澤にそういう戸惑いがあったとしても不思議ではない。そのせいばかりではないだろうが、日記の字面からは覇気が失われてゆく。

昭和17年7月20日

このごろとても口の滑り悪く、アナウンスの調子悪し。生活の反映か……。

昭和17年12月23日

口の中に何かしゃべるのを邪魔しようとする何ものかがあって、毎日日々自信のまるでないマイクに向かっている。寝ると終始、とちった夢ばかり見ている。

立澤は時代から取り残されたような気持ちでマイクに向かっていた。そしてそのころ、東京では時代の申し子とも言うべき新人アナウンサーたちが研修所から巣立とうとしていた。

雄叫び会

「いらっしゃいませえ」

人なつこい笑顔を浮かべた老人は、おどけた調子で撮影クルーを迎えてくれた。マンショ

ンの高層階からは、初夏の陽光に輝く都心のビル群が一望できた。

ETV特集「戦争とラジオ」の撮影で、元日本放送協会アナウンサー・佐々木敏全としまさ（当時86歳）を訪ねたのは、2009年5月のことである。インタビューの準備を始めるカメラマンを懐かしげに見ながら佐々木が言った。「狭いからなあ。私、どこに座ろうか。ここに座って押し入れを背中にするか、それともこっちに座って東京駅の方向を背景にするかだね。カメラはそっち側に回らないと、ほら、こっちだと背景が工事現場になっちゃうから」。

佐々木はテレビの青春時代を飾ったアナウンサーの1人である。人気番組『ジェスチャー』の3代目の司会を務め、夜7時のニュースを担当していたこともある。引退から30年が過ぎても、カメラと自分の位置を計る感覚はプロのものだった。だが、この日、私が聞こうとしていたのは、佐々木が駆け出しのラジオ・アナウンサーだった戦時中のことである。

佐々木が放送員試験に合格したのは1942年の秋だった。『放送研究』に佐々木たちが試験で読まれた原稿が掲載されているが、それは例えば次のようなものだった。

ビルマ方面航空部隊は、一昨九日、我が戦闘機隊がビルマ西南岸のアキヤブに襲撃した敵機五臺だいを撃墜したと、きのふ次のように発表しました。

敵空軍は九日十時四十五分ブレンハイム爆撃機九機、十三時三十分ブレンハイム爆撃機四機、次いで十五時十五分ロッキードハドソン爆撃機六機を以てアキヤブに襲撃せり。我が戦闘隊は之を邀撃しブレンハイム三機、ロッキードハドソン二機を確實に撃墜せ

り(後略)¹⁴⁾。

佐々木たち放送員第12期生22人は、音声テストでこのような原稿を読み、日本放送協会に入局した。同期には、戦後、『ジェスチャー』や『私の秘密』『紅白歌合戦』などの司会を担当した高橋圭三、『のど自慢』や『ふるさとの歌祭り』などの軽妙な司会で一世を風靡した宮田輝がいる。

「こんな写真が出てきましたよ」

佐々木は1枚の集合写真を机の上に置いた。2か月半の研修を終え、地方局に散ってゆく前の記念写真だという(写真3)。

「放送会館の屋上で撮ったんじゃないかな。これが高橋、こっちが宮田ですよ。若いねえ、もう2人ともいないけど」

「佐々木さんは?」

私は写真の中に佐々木の面影を探したがわからなかった。

「私ですか。これですよ。笑っちゃうね」

佐々木は高橋圭三と肩を組み、穏やかな笑みを浮かべていた。

「研修が終わるころにね、同期会の名前をつ

ける慣習があったんです。私たちの会はね、『雄叫び会』っていうんです」

私にはピンときた。太平洋戦争の時代、それまでの「淡々調」が「雄叫び調」に変わったことは、佐々木にインタビューを行ったこのとき、すでに知っていた。

「『雄叫び調』の雄叫び、ですね?」

「そう、その『雄叫び』です。よくご存じで」

「いえ、そういう言葉を聞いたことがあるだけです。どんなものだったんですか?」

佐々木自身の言葉で「雄叫び調」について聞きたかった。

「太平洋戦争が始まる前までは、僕たちの先生も含めて先輩方のアナウンスというのは、俗に『淡々調』と言うんですよ。全部、淡々として読み上げる。放送の内容は、ラジオを聞いている人が判断するのであって、放送員たるものは自分の感情だとか思想、そういうものをむき出しにしたり、感情移入してはいけませんと、そういうことでした。早い話が活字だね。活字自体には感情はないでしょ、ただわかりやすく読みなさい、というのが『淡々調』です」

佐々木は、「雄叫び会」の記念写真に時折目を落としながら続けた。

「ところが開戦と同時に、あの大きなニュースがボンッと飛び込んできたでしょ。『大本営発表。アメリカのハワイ沖で……』でしたっけ、あの臨時ニュースはね、館野守男さんがお読みになったのですが、破裂音があります。あるいはアクセントがね、^{あたまだけ}頭高になっているんですね。『ダイホンエイ ハッピーウ!』というふうだね。フラットにやっちゃうと、流れちゃうんです。迫力がない」

破裂音とは、鼻と口、両方の通気を

写真3 研修終了後の記念写真



後列左から2番目が佐々木

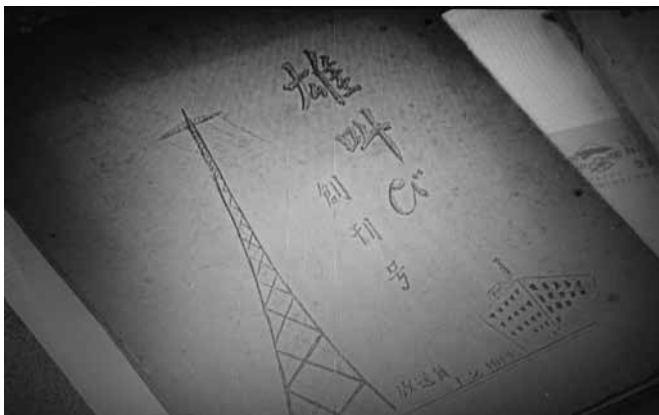
遮断するようにしてから一気にはき出すように発声する音である。頭高とは、言葉の頭にアクセントを置く発音である。開戦を伝える館野のアナウンスには、そういう発声法が用いられたのだという。佐々木が「雄叫び調」で発声した「ダイホンエイ ハッピーウ!」は、怒鳴っているわけでも、声大きいわけでもないのだが、言葉が鋭い矢となって向かってくるようだった。

「これはね、誰に教えられたわけでもないんです。開戦の原稿を受け取ったらね、自然にそういう読み方になったんです。それを先輩方があとからね、『雄叫び調』って呼んだんです。『淡々調』ではなく『雄叫び調』だって。時代が『雄叫び調』を受け入れたんですね。そうでなければならなかった。そういう時代でした。だからね、我々の同期会は『雄叫び会』にしたわけです」

立澤たちが「淡々会」をつくってから2年、1942年12月、佐々木たちは「雄叫び会」を結成したのである。

佐々木は、1冊の手作りの冊子を手に取った。綴じ糸がほつれかかった冊子の表紙には送電塔と放送会館のイラストがほどこされ、「雄叫び 創刊号」の文字が躍っている(写真4)。

写真4 『雄叫び』創刊号(1942年12月)



「『雄叫び会』の面々が、研修が終わって地方に散らばってゆくときに作った冊子です。創刊号ってあるけど結局これっきり。創刊号にして終刊号です」

佐々木を含め同期の多くは、赴任先で応召し戦地に赴いた。戦死した者もいる。同期会の会報どころではなかったのだ。

創刊号のページをめくると、冒頭、研修の教官を務めた和田信賢^{のぶかた}が「雄叫び会へ!!」と題する文章を寄せている。

「雄叫び会」の諸君二ヶ月の錬成が実を結んでいよいよ巢立ちの日、諸君に私が贈る言葉は「実力を信じてゆけ」の一言です。史上空前のハワイ大空襲の征途を前に母艦の上に〇〇艦長が凜烈の気にある風浪の中に佇立^{ちよりつ}して火を吐くこの一言こそ諸君への放送員第一歩の出発に際して最も簡潔力強い送別の辞であると思います。(中略) 報道戦士としての心がまへ「肚」をつくり諸先輩に伍して大東亜戦争下の輝かしい報道陣の一翼として諸君にかかる期待を裏切らないよう心から御願ひ致します。

和田は「僕の短気な我儘をよく諸君は許してくれました」「辛かったあれやこれやを明日の歓びとして手を取りあふ日の必ず来るであろう事を思」う、とも書いている。厳しくも真摯な教官だった。あこがれの先輩の檄は新人アナウンサーたちの心にまっすぐ届いたことだろう。和田の檄に続き、22人が旅立ちの決意を寄せている。戦後放送史にその名を刻み、ともに国会議員となった2人のアナウンサー、宮田輝と高橋圭三の文章から

抜粋してみよう。

“帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋に於いて米英軍と戦闘状態に入れり”あの日あの時、開戦^{へきとう}劈頭の歴史的ニュースを始め、一億国民感激の幾多重大放送を教材に新時代のアナウンス、迫力のある堂々たるアナウンスを目指して十月以来錬成の二ヶ月、大東亜戦争下初めての放送員養成、第一二期生も^{いよいよ}愈々教育も終わり、(中略)聲の戦士として力強く出発の雄叫びを挙げることになりました。

宮田輝

大東亜戦争一周年、吾々はこの間に放送員としての基礎教育を受け、放送員としての一步を力強く踏み出さんとしている。即ち戦争時代に生まれ、戦争時代に育てられたアバレンボウだ。吾々は気迫^{ふけ}と迫力——若さをもって邁進しよう。マイクに依って突撃しよう。

高橋圭三

2人の言葉のなんと勇ましいことだろう。宮田にしろ高橋にしろ、戦後は庶民的でソフトな話しぶりで人気を集めたアナウンサーだった。人は時代の中でしか生きられないのだと改めて思う。

佐々木はどう書いていたのだろう。

みぞれ降る夜はひと恋し / 侘びしき炬燵に
来ぬひとを / こがれてひとりもの想ふ / 帰
へらぬひとにこがれつつ / 炬燵に入りて顔伏
せど / みぞれ降る夜はひと恋し

意外にも、佐々木は情緒的な詩を綴っていた。このあとも、恋の甘さと苦さ、そして夢や

ぶれ独り飲む酒の味がうたわれている。中学校時代から石川啄木にあこがれて詩を書いていたのだという。佐々木の文章は22人の中でも異彩を放っていた。詩のあとには、次の一文が添えられている。

吾々は強くあらねばならない。闘はねばならない。然し幼き頃のあの心はいつ迄もいつ迄も失ひたくない。夢みる心も欲しい。

青春の感傷と、時代の要請に答えなければという使命感。2つの心情の間に揺れる若き日の佐々木の姿がそこにあった。

「ちょっと今、読めないね。『雄叫び会』の中でズレていますね。自分だけこんなことを書いて」

私は「素敵じゃないですか」と言いかけてやめた。思いに耽る^{ふけ}佐々木の表情をカメラが静かに押さえるほうがよい。

「雄叫び調」誕生伝説

さて、佐々木敏全はインタビューに答えて、開戦の臨時ニュースこそは「雄叫び調」アナウンスの劈頭であり、それは「誰に教えられたわけでもなく」「自然にそういう読み方になった」のだと語った。そのとき、私は素直にそれを聞いたのだが、今回、改めて書き起こして、小さな違和感を覚えた。先述したように太平洋戦争の開戦前から、アナウンサーたちは「淡々調」に代わる新しいアナウンスを模索していたのであり、臨時ニュースのアナウンスは、その帰結だった。だが、佐々木の言い方からは、そういう経緯は伝わってこない。あたかも、「雄叫び調」は、何の前触れもなく、太平洋戦争開戦を伝える臨時ニュースとともに始まった

かのような。なぜ佐々木はそんなふうにしたのか、改めて資料を読み込んで、その理由がわかった。佐々木は事実を記憶していたのではなく、先輩たちによってつくられた伝説を記憶していたのである。

和田信賢とともに佐々木らの研修を担当した川名正一は、開戦から1年後、館野守男による開戦の臨時ニュースについて「放送員の主観感情の露わな迸出を禁じた従来の技法上の制約は無視された」とし、次のように述べている。

緒戦の大戦果の感激に酔う興奮が鎮まると、この激しい嵐のような技法上の変革に対する活発な検討が行われ始めた。先ずこの現象に対する説明が種々行われた。反淡々調に対する淡々調の敗北であるとか、或いは「正しき伝統」である淡々調がその任務を果たし、代わって新しき情勢に即応すべき情熱的アナウンスが生まれたとかである。これらは一面の真実性を持っているが、事実の真を衝いていない。あとから考えた尤もらしい説明である。前者を是とすれば、大東亜戦争勃発以前に既に、この事あるを予見したような技法上の主張が、淡々調に対立して存在したかの如くであるが、かかる事実は無かった筈である。(中略) 事実、われわれに不意打ちを食わして突然思いもよらずに出現した巨大な現実に対しては、用意された理論も主張も技法もある筈は無く、たゞ持ち合わせている国民的感情を唯一の武器として必死に立ち向かったという事である¹⁵⁾。

川名は、「淡々調」に対立する主張は太平洋戦争開戦前には存在しなかったと言う。だが、先述したように、対米戦争の危機が高まった

1941年夏以降には、アナウンサーたちは「淡々調」を乗り越えようと「火のように論議」していたのであり、それは日本放送協会全体の課題にもなっていた。そして開戦直前には、「淡々調アナウンスの敗北」が明言されていたのである。

川名の論は事実ではない。いわば「雄叫び調」誕生伝説とでも言うべきものだ。佐々木敏全にとっては研修所の教官である川名のこの論が『放送研究』に掲載されたのは1942年12月。まさにその月、佐々木らは同期会に「雄叫び会」の名をつけ、それぞれの任地に旅立っていったのである。佐々木らが「雄叫び調」誕生伝説を、そのまま事実として受け取り、記憶し続けても不思議はないのだ。

伝説を語るのは川名だけではなかった。開戦の臨時ニュースを読んだ館野守男自身も「最早慎重検討の余裕はなく、即刻実行を迫られた。理念に先立って、実践が出発したのである¹⁶⁾」と述べている。そして、先述したように、日米決戦という新しい時代のアナウンサーは「宣伝者」であれ、「情熱の人」であれと続けているのだが、実はその主張は「アナウンサーは、もっと、いゝ意味のプロパガンディスト乃至アジテーターにならなければいけない」という、開戦前の安齋義美の主張をそのまま敷衍したものだ。実践に先立って理念があったのだ。そうなのに、なぜ、当時のアナウンサーたちは「雄叫び調」の誕生について、口裏を合わせるように事実と反する主張を繰り返したのだろうか。

私の考えを述べる前に、まず、「雄叫び調」が生まれる背景には軍からの要求があったことを確認しておこう。

軍の要求と「雄叫び調」

「ミズタニっていうんですが、今でも名前忘れませんよ」

神宮外苑で行われた出陣学徒壮行会の実況放送（1943年10月21日）で知られる志村正順は、NHK放送文化研究所による聞き取り（1986年）の中で、情報局情報官¹⁷⁾・ミズタニによる「指導」について次のように証言している。

「主立ったアナウンサーを全部、第8スタジオに集めて、放送原稿を読ませるんですよ。

それで『米英に対する憎しみが放送に出ておらん』って批評するの。『君のは勢いがいい』とか『君のは、鬼畜米英という言葉に敵愾心がこもってらん』と。だから『米の所に獣偏を付けろ』っていうんですよ。『英にも獣偏を付けて読め。そうすれば鬼畜米英っていう感じが出るだろう』というようなことを言うんです。それは今でもはっきり覚えていますよ¹⁸⁾」

志村は「情報官っていうのは嫌な奴でね、みんな」とも言っている。第8スタジオでの情報官による指導は、その名前を忘れられないほど不愉快な体験だった。

志村だけではない。戦後、市井の人々の声にマイクを向け、ラジオの民主化を印象づけた『街頭録音』の司会で知られる藤倉修一は、情報局や陸海軍報道部の指導について次のように回想している。

その大戦果?の発表をボクたち放送員が少しでも読みちがえたり、淡々と放送したりすると「あの放送員は敗戦主義者ではないか…」等と、あらぬ疑いをうけて左遷されたりすることがある。そこで、こちらも自衛上、何でもいいから馬鹿デカイ声をはり上げて、「**ダイホンエイ ハッピーウ**」と、**ドナリ**のアナウン

ス、**ハッターリ**のアナウンスに転向せざるを得なかった¹⁹⁾。（傍点・太字は原文）

あるいはまた、サンフランシスコ平和条約調印式の実況放送などで知られる浅沼博は次のように回想している。

この大戦果を、満身の熱と意気と力をこめて絶叫せよという、サーベルの御注文なので、腹が減るくらい、大きな声で怒鳴って来てもまだ「柔弱である」というお叱りである、こうなれば、アナウンスなんて、しゃれた考えではどうにもならない。高らかに吹き鳴らすかの突撃ラッパの如くあれということで、誰が名づけるともなく「雄叫び調」という珍妙なアナウンス・スタイルが発生した²⁰⁾。

志村や藤倉、そして浅沼の回想からわかるのは、「雄叫び調」が、軍の要請と無関係ではなかったということである。突撃ラッパのようなアナウンス、**ドナリ**のアナウンスが軍の要求する文字どおりの「雄叫び調」だった。

しかし、実際に行われた「雄叫び調」アナウンスは、そのようなものではなかった。「雄叫び調」の劈頭とされる開戦の臨時ニュースが、決して“雄叫んで”などいなかったことは、今、実際に聴いて確認できるし、遺されたほかの録音を聴いてもその印象は変わらない。例えば、本シリーズ冒頭で高橋映一が自作の録音機で戦時中のニュースなどを記録していたことを記したが、その中にフィリピン・レイテ島の戦果についての大本営発表がある（1944年10月26日放送）。アナウンサーが読んでいるのだが、緊張感があっても怒鳴っているわけではない。

藤倉や浅沼が軍人の前ではともかく、実際

の放送で「馬鹿デカイ声をはり上げ」たり、「腹が減るくらい、大きな声で怒鳴っ」たとも思えない。『放送研究』誌上のアナウンサーたちの主張を丁寧に読めば、「雄叫び」のようなアナウンスを主張しているものは皆無であることがわかる。彼らが主張していたのは、端的に言えば“主観を込めた情熱的なアナウンス”だった。

アナウンサーではなく、軍の広報官自身がラジオ放送のために読む「大本営発表」のいくつかは今も聴くことができるが、それらは文字どおりの「雄叫び調」と言ってよいものだ²¹⁾。軍は、日本放送協会のアナウンサーにもそのように馬鹿デカイ声で読んでほしかったのだろうが、もしマイクに向かってそうしていたとすれば、マイクの性質を知悉したプロのアナウンサーではすでになく、本当の馬鹿である。

そもそも、当時の放送研究誌などの文献で「雄叫び調」という呼称を確認できたのは、『放送研究』1943年10月号に掲載された「放送前進の為に」という座談会が唯一である。その中でアナウンサー出身の友安義高業務部長が、「戦争前の形をわれわれは俗に淡々調と言い現在の形を雄叫調と言っております」と発言している。そして「殊にこういう戦時下になりまして、強い感銘を与える報道というものが絶対要求されて参りますと、ますます自分の個性、主観を入れて読み上げるほうが感銘が深いということから、雄叫調というものが当然生まれて来た」のだと述べている。ここでも「雄叫び調」とは、アナウンサーの主観を入れて読むアナウンスであり、大声で怒鳴るようなアナウンスではない。友安はこうも言っている。「雄叫という名前が適当であるとかないとかいうことも議論している時ではない」。

ここからわかるのは、当時のアナウンサー・

グループの中には「雄叫び調」という呼称への批判が存在していたことである。彼らは実際には叫ばなかった。張り詰めたトーンで戦況ニュースを読みはしたが、「突撃ラッパ」のように読んだわけではない。彼らは、いわば、叫ばない「雄叫び調」をつくり出したのである。そうならば、別のもっとふさわしい呼称があってもよかつたはずなのだ。「雄叫び調」という呼称は、もともとは軍の言う「突撃ラッパ」のようなアナウンスを揶揄したものだではないだろうか。

伝説の誕生

戦況ニュースは「突撃ラッパの如くあれ」という軍の要求は、おそらく太平洋戦争開戦前からあった。大本営陸海軍部公表「武漢三鎮攻略」（1938年10月27日放送）の音源が遺っているが、それを聞いてみると、軍人による戦果発表は、そのころからすでに、まさに「ドナリのアナウンス、ハツリのアナウンス」と言うべきものだった。というより、それはアナウンスの名に値するものではないのだが、軍にとっては一貫してアナウンスとはかくあるべきものだった。日中戦争勃発当初、アナウンサーたちが「戦況ニュースはもっと元気を出して戦況らしく読め」と軍から要求されていたことは前編に既述した。そのとき、アナウンサーたちは「淡々調」こそが戦時にふさわしいアナウンスであるという論理を構築したのだが、日米開戦が視野に入ってくると、軍は再び放送協会にアナウンス技法の変更を強く迫っていたのではなかったか。

だが、日本でラジオ放送が始まって以来、試行錯誤を続けてきた言葉のプロたちにとって、「サーベルの御注文」はそのまま受け入れ

られるものではなかった。文字どおりの「雄叫び調」は邪道である。しかし、アメリカとの戦争という途方もない現実が、アナウンス理論の変更を迫っていること自体は否定できない。彼ら自身、「淡々調」は「著しく魅力を失いかけたアナウンス形式になろうとしている²²⁾」と感じていた。『アナウンス読本』が言う「隠微なる手段」ではもはや事足りない。世界は変わったのだ。

では、時代にふさわしいアナウンスを自分たちならどう実現するのか、どうすれば自分たちの力を戦争に生かすことができるのか。彼らは太平洋戦争開戦の前後、『放送研究』誌上で議論を戦わせたのである。

岡本正一は「溢れる日本人的性格を素直に忠実に、そして最も強烈に表現すべきだ」と主張していた。館野守男は、アナウンサーは「宣伝者」たれ、「情熱の人」であれと書いた。友安義高は「主観を入れて読み上げ」ろと言った。アナウンサーたちはアナウンスという仕事を通じて戦争遂行に寄与するために、侃侃諤諤^{かんかんがくがく}の議論を重ねた。それは、彼らがそうと明確に意識していたかはともかく、軍の要求を自分たちが受け入れ可能なものに変換しようとする作業だった。別の言い方をすれば軍の要求を内面化してゆくプロセスだった。そして、内面化の完成には伝説が必要だった。開戦の臨時ニュースを館野が読んだとき、「用意された理論も主張も技法もある筈は無く、たゞ持ち合わせている国民的感情を唯一の武器として必死に立ち向かった」という伝説である。軍に要求されたから新しいアナウンスが必要なのではない。それは意図せず、必然的に生まれたものである。そう信じたときに、内面化は完成したはずだ。

この戦争は明るい

軍の要求に対して、日本放送協会のアナウンサーはどう対応したのか、改めて整理してみよう。

アナウンスに求める軍の方針は、一貫していた。日中戦争勃発当初は、戦況ニュースを「元気を出して戦況らしく読」むことだった。そして、その要求に応じてアナウンサーたちは「やむなく調子を張り上げて読んだことがあった²³⁾」。

だが、彼らはまもなく、「淡々調」こそ戦時にふさわしいという理論を生み出す。1941年8月に作られた「淡々調」の理論書『アナウンス読本』は次のように述べていた。

隠微のうちに人の心を捕らえ、知らず知らずのうちに人の共鳴を獲、かくして国策を宣伝し民心を統一せんとするものである。

だが、太平洋戦争の危機が迫る中で、アナウンサーたちは軍の要求を背景に再考を迫られた。「アナウンサーは、もっと、いゝ意味のプロパガンディスト乃至アジテーターにならなければいけない」のではないかと、そう考えたのである。そして太平洋戦争が始まると、館野守男は、アナウンサーは「宣伝者」であれ、そのために「情熱の人」であれと言ひ、こう続けた。

情熱によって国民を捉え、其の感情を結集し、組織し、之を一定の方向へ動員しなければならぬのである。

太字で示した部分を比べてみれば、両者の類似と相違は歴然としている。国民を国策の方向に誘導するという目的はまったく同じであ

るが、その手段について『アナウンス読本』は「隠微のうちに」と言い、館野は「情熱によって」と言うのだ。

この鮮やかな対照を見て思い出すのは、太平洋戦争開戦時の気分について文学者たちが遺した言葉だ。例えば中国文学者・竹内好はこう書いている。

戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。一切が明らかとなった。天高く光清らかに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。ここに道があったかとはじめて大覚一番、顧れば昨日の鬱情は既に跡形もない²⁴⁾。

対米英戦争の開戦までは、アジア解放というスローガンとは裏腹の日に戦争の実相（それはアジア侵略にほかならなかった）に竹内は「鬱屈」していたのである。

あるいは、小説家・伊藤整は日記に次のように記している。

この戦争は明るい。（中略）平均に幸福と不幸とを国民が分ちあっているという気持は、支那事変前よりも国内をたしかに明るくしている。そして大東亜戦争直前の重苦しさもなくなっている。実にこの戦争はいい。明るい²⁵⁾。

このような気分は文学者に限らず、多くの日本人を捉えたものだった。館野守男は「雄叫び調」について、「淡々調ニニュースに代わって、未曾有の現実に対する国民的感激を唯一の足場として生まれた新しいニュースアナウンス²⁶⁾」（傍点は引用者）と表現している。

「この戦争はいい。明るい」、この気分こそが、国民を国策の方向に「隠微のうちに」導くアナウンスから「情熱によって」導くアナウンスに転換させたのではなかったろうか。

いや、順番が違う。既述したように「雄叫び調」は太平洋戦争の開戦と同時に生まれたのではなく、その日に向けて着々と準備されたものだった。国民の多くが太平洋戦争の開戦を感激をもって迎えたのは（竹内好や伊藤整もそうだったとは言わないまでも）、それを伝えるアナウンスの調子に与るところもあったはずだ。そうだとすれば、日本放送協会のアナウンス戦略は大きな成功を収めたことになる。「情熱によって国民を捉え、其の感情を結集し、組織し、之を一定の方向へ動員」したのである。

技術論の不在

さて、立澤正雄の上司、大平伊太郎が、東京から「宣伝調」（いわゆる「雄叫び調」）を長野に持ち帰ってからの立澤の不調についてはすでに書いた。その立澤は、ある日、新しい直属の上司から決定的なことを言われる。

昭和18年3月17日

夕方飯田氏と話しながら帰る。余のアナウンスは全然若さといふものがないといふ話。只すらすらと字面を追っているのみであるという評。共に痛過ぎる言葉であった。若さを喪失したアナウンスは油の切れた車同様、聴者に焦燥感を与えるのみである。この日頃、何が故に冴えきれぬ心ぞ。

「飯田氏」とは、1943年1月、大平に代わって東京から長野に転任してきた新しい係長、飯田次男である。飯田の着任の日（1月21日）、

立澤は「AKの飯田アナウンサーとて、名声を博した飯田氏、(中略)肅然として雪の長野に来る」と日記に記している。

飯田の宿に呼ばれて夕食をともし、「アナウンスよもやまばなし」に耽ったこともあった(1月30日)。立澤にとって飯田は「雄叫び調」全盛の東京から来たまぶしい存在だった。その飯田から、自分のアナウンスには若さがない、字面を追っているだけと酷評されたのだ。東京転勤を夢見ていた立澤の落胆は想像に余りある。

まっさらな新人時代に「淡々調」をたたき込まれた立澤にとって、そこから脱することは容易ではなかったろう。だが、その責は立澤だけにあるのではない。「雄叫び調」には具体的な技術論がなかった。そのことが「淡々調」から「雄叫び調」への転換を一層難しいものにしていった。

「淡々調」の理論書である『アナウンス読本』は、アナウンスは「『全国の皆様』に広く呼びかける」のではなく、受信機の前にいる「あなた」に向けて発せられるべきものだとしていた。そしてアナウンサーは黒子に徹するべきで、ニュースは淡々と上品に読むことが求められた。具体的でイメージしやすい理論と言ってよい。

一方、「雄叫び調」には精神論しかなかった。先述したように、「雄叫び会」の佐々木敏全は、館野守男の開戦の臨時ニュースについて、破裂音の多用、頭高のアクセントの2点を指摘した。だがそれは、今から見ればそう言えるということであり、当時からそのような具体的な技術論があったわけではない。報道部の中澤道夫は「声を強くし、調子を張るというような表面的なことではない」と強調していた。アナウ

ンサー自身が「情熱の人」であること、そのアナウンサーの主観を前面に出して読むこと、それが「雄叫び調」だった。

そういう主張は『放送研究』誌上で何度も何度も繰り返される。以下に、立澤が「淡々調」から「雄叫び調」に転換できずに苦しんでいたところに書かれた2例を挙げておこう。

正直に、素直に、自分の今持っているものを、マイクロホンの前で、ぶちまける勇気を養うことが、健康な、アナウンス技術修練の第一歩ではないであろうか。

館野守男「創造、即興ということについて」
『放送研究』1943年5月号

要するに、目下提唱されている情熱調を推進せしむる根源は放送員自身の真摯な感動にあると言いたい。(中略)この感動は、単なる思いつきや頭だけで考えついたものからは発しない。放送員の肉迄徹している時局観、国家観、世界観から発するものである。

川名正一「アナウンスの魅力」
『放送研究』1943年6月号

「真摯な感動」とか「時局観、国家観、世界観」なら誰にも負けないと立澤は思ったことだろう。だが、それでは実際、どうニュースを読めばいいのか。ほしいのは精神論よりも技術論だったはずだ。

技術論の不在という問題は東京でも浮上していた。繰り返される精神論に対して、1人のアナウンサーが真っ向から挑んだことがある。立澤より3年先に入局した川添照男の論考「アナウンス技術の尊重」が『放送研究』誌上に載ったのは1943年8月のことだった。

川添は「殆ど毎月の様に絢爛たるアナウンス理論が本誌に発表され、しかもそれが決して間違っているとは思えない堂々たる論文である」と皮肉交じりに述べたうえで、それにもかかわらず、自分を含めた多くのアナウンサーがずっと「悩んでいる」実情を訴えている。そして、「淡々調」が時代にそぐわないことを認めつつも、それが形成されてきた歴史もろともに全否定する風潮への疑問を表明している。

しかし、放送員の場合、技術を伴わない論というものは殆どゼロに等しいのである。私が淡々調は生きてると云ったのは、技術を尊重した先人の苦労を云うのである。「淡々調」と共に「アナウンス技術」そのものさえ否定しようとする過剰な自意識はナンセンスである²⁷⁾。

川添の「アナウンス技術の尊重」は、精神論ばかりが繰り返される現状への勇氣ある批判だった。しかし、『放送研究』翌月号には、すぐさま、暗にそれを批判するコラムが載った。コラムは、ある歌人の「無思想の技巧、技巧としてだけの形式化」をいましめる歌論に賛意を示し、次のように述べていた。

常住坐臥じょうじゅうざがい、聊かなりと決戦生活を阻害する如き懈怠けたいはないか、内に潜む僅かの旧体制の残滓はないか、在来の安易感の少しでも心の隅に巢喰ってはいないか、数々の自省によって内に備えるべきものを充し、この自信に於いて戦う放送員としての積極性を昂揚せしめたいのである²⁸⁾。

議論はかみ合わないまま、堂々巡りに陥って

いた。技術の重要性を訴えた川添自身も、「雄叫び調」の技術論を生み出すことはできないまま応召し、1945年3月、戦死している。「雄叫び調」が新しい『アナウンス読本』を持つことはなかった。技術論の不在を埋めるように、精神論が告知課（現在のアナウンス室）を支配していた。

本当にいいのかな

茂木もて太郎（2009年当時90歳）は、東京・世田谷のマンションに夫人と2人で暮らしていた。背筋がピンと伸び真っ赤なトレーナーがよく似合っていた。

茂木は1940年、日本放送協会にアナウンサーとして入局、熊本、大分、福岡を経て、1942年12月、東京の告知課に異動した。茂木を訪ねたのは、技術論の再建を求める若手アナウンサーの声、精神論にかき消されていたころの、告知課の空気を知りたかったからだ。

茂木は夫人が淹れたコーヒーを一口飲んで話し始めた。

「あのね、お聞きになったことあると思いますが、雄叫び調というのが流行りました。大本営発表ってあるでしょ。ああいうニュースっていうのは勝った勝ったですからね、やっぱりこういう感じで読むわけです、上へ上へね」

そう言って茂木は、天井に向けた掌を上げ下げする仕草を繰り返した。

「なんか、本当にいいのかなっていう気持ちもありました、どこかにね。私たち大正11年生まれですからね。おわりの時代でしょ。日本っていうのは昭和初期までは、右もあるけど左の思想もあったわけですよ。そういうのがどこかにあるから、本当にいいのかな、大丈夫のかな、っていう気持ちがあったんですね。

でも仕事だからやろうってね、どうしてもだんだんそうなっていくわけですよ。怖いですよ」

茂木の言う「おわりの時代」とは、大正デモクラシーの時代を指している。民主的な思想だけではなく新しい風俗も開花したその時代、東京・銀座などでは斬新なファッションに身を固めたモダンガール、モダンボーイが闊歩していた。そういえば、真っ赤なトレーナーを着こなした茂木は、往年のモダンボーイを思わせなくもなかった。

「雄叫び調で読む大本営発表ニュースに自分で疑問を持つこともあったのですかね?」

「まあ、そうですね。本当かいな、というのはね。仲間で酒なんか飲んで、『ヤバイんじゃないか』みたいなね。今の言葉で言えば」

「でも、おおっぴらには言えませんね」

「いやあ、だめだ」

茂木は首を大きく横に振って続けた。

「もう情報局が睨んでいましたからね。第一、アナウンス課長がね、当時は告知課長ですが、元軍人なんです。陸軍士官学校出の軍人なんです。負けたなんて言おうものなら『なんだ、お前は』ってなるに決まっているわけです」

「内心そう思っているけど、言えるはずはない」

「ええ。指導じゃなくてあら探しですから。何か言えば『それは今の時勢には向かない』とかね。一番嫌だったのはですね、せっかく地方から東京に帰ってきたのにね、変なこと言えば『また、お前、行けよ。すぐ帯広に行け』『あなた釧路へ行け』なんてすぐ言われるわけですよ。それが本当に嫌でした。当時のローカルは設備もないし、人もいなかったですからね」

戦争という巨大な出来事と、放送局内の転勤話はあまりに不釣り合いだったが笑えなかった。時代を越えてリアルな話だった。

「やっぱり、告知課の中で思想的に睨まれるって空気はあったんですか?」

「あったと思います。表立ってではないけどね。だいたい課長にそういう人を持ってくることで自体が変でしょ。名前ちょっと思い出せないんだけど、あの野郎」

茂木はそう言って大げさに顔をしかめた。

恥ずかしくはなかった

「雄叫び会」の佐々木敏全は、研修を終えて1943年1月、札幌に赴任、1944年5月に応召し中国に出征するまで、函館、旭川、帯広の各放送局に勤務している。

佐々木は、当時、自分が作り自分で読んだ原稿の一部を綴じ込み、「自作 放送原稿」という表紙をつけて保存していた。その中に『決戦詩集・北の防人』という番組台本がある。戦意高揚を目的として書かれた詩人の作品を朗読する番組だったが、冒頭には佐々木が書いた前文が置かれている。

「当時、これ、どんなふうを読んだんですか。冒頭だけでもちょっと」

「ええっ、読むの? アンタ、高いよ」

そう言いながらも、佐々木は姿勢を正して読み始めた。

かけまくもあやに^{かしこ}長きすめろぎの神のみ民として限りなきこの皇土に生を受け遠きわれらが祖先の血をうけ接ぎ今ぞ我等試練の嵐に身を挺す。雄々しき哉、奮躍難に赴いて死を辭することなく。逞しき哉、^{こうがい}慷慨義に基きて。米英百年の桎梏より東亜の東亜を取り戻し蕩々たる皇風大東亜に^{あまね}浴ぎ旭光はや蒼穹^{さん}に燦として輝く。

ニュースではないが張り詰めた読み方だった。いわゆる「雄叫び調」と言ってよいのだろうが、無論、叫んでいるわけでも怒鳴っているわけでもない。

「もういいでしょ、アンタ」。朗読をやめて佐々木が言った。

「こんなに力まないですよ。ちょっとおだてにのって力んじゃったけど。まあ、漢文調でリズムカルだけど内容空疎ですよ、こういう文章は。調子だけで流している。そういませんか?」

「でも、当時はそんなふうには思わなかったんじゃないですか?」

「やっぱり、自己陶醉していたんじゃないですか。戦意高揚ですね。そういう時代だったんです。僕は時代の波に逆らうことなく月給もらってちゃんと勤めました。当時は当時らしくね。そうしなきゃ生きていられなかったでしょうね。NHKをクビになるだけじゃないですもの。あのアナウンサーはおかしいということになりゃあね、もっと大きなことになるでしょう。家族にも及ぶし、放送局全体にも迷惑をかけるしね、そこはもうしょうがないのじゃないですか」

「でも佐々木さん、当時からそんなふうに醒めていらっしたんですか?」

「醒めているっていうんじゃないで、ただ自分は時流に乗っていただけということ。積極的に陣頭に立って旗を振るという気持ちは私にはなかった。これだけははっきり言えますね。みんなの時流についてゆくという。最後のほうにこう尻尾を振ってついていだけの存在でしたよ」

「でも、当時は……」。再び聞こうとする私を遮って佐々木は続けた。

「今じゃ恥ずかしくて読めないけれども、当時は恥ずかしくなく読んだんでしょね。それは言えるわ。恥ずかしくはなかった」

元「雄叫び会」の佐々木敏全はまっすぐに私の目を見て言った。「お前にあの時代がわかるのか」。そう言われたような気がした。

昭和19年の『アナウンス読本』

1944年1月、立澤正雄は日本統治下のパラオへ転任することになった。太平洋戦争開戦以来、活躍の場を求めていた立澤の夢がようやくかなったのである。

昭和19年1月23日

朝九時過、局長室にゆく。転勤先は南洋諸島パラオ放送局。(中略)男子と生まれて然も千載一遇の国家興隆の時運に際会し、あたら兵たるの光栄を担へざる身が、たまたま選ばれて、南洋防衛の第一線に赴くことを得る幸せ、之に過ぐるはないが、ただ後に残るものが心配になる。しかし妻は心強くも平然としてパラオ転任の報を聴いてくれた。それがどんなに自分の心を勇気づけてくれたことか。

立澤は使命感に燃えてパラオに向かった。日記を読む限り、立澤が主観を前面に出すアナウンス「雄叫び調」を自分のものにできたかは疑わしいが、パラオ行き自体が、立澤なりの主観の表現だったと言えるのかもしれない。

兵と弾薬を満載した輸送船に立澤がようやく便乗できたのは1944年3月末である。兵はサイパン島で下船、5月3日、立澤がパラオの土を踏んだとき、すでにそこはアメリカ軍の空襲にさらされていた。8月、パラオ放送局は閉鎖、以後、立澤は軍と行動をとともにすることになる。立澤がパラオ放送局に勤務したのは、わずかな期間にすぎなかった²⁹⁾。日本からの輸送船

に同乗していた兵士たちはサイパン島で全滅していた。

同じころ、東京ではまた、新人アナウンサーたちの研修が始まっていた。彼らが教室で使ったガリ版刷りのテキストが遺されている。表紙には『アナウンス読本』のタイトルがあり、その隣に「昭和一九年五月」と刷られている。1941年8月に発行されたあの『アナウンス読本』ではない。全78ページ、前書きも解説もなく、過去のニュース原稿を集めたものにすぎなかった。先に「雄叫び調」が新しい『アナウンス読本』を持つことはなかったと記したが、修正の必要は認めない。

例題として使われているニュースは、例えば次のようなものである。

大本営発表（一月十日十五時）

- 一 帝国海軍航空部隊は、一月九日午前、ラバウルに來襲せる敵機百五十機ようを邀撃げきし、その五二機（内不確實一九機）を撃墜せり。我が方の損害、未帰還二機。
- 二 既報一月七日のラバウル航空戦に於いて、帝国海軍航空部隊が収めたる戦果に、撃墜三機を追加す。
大本営から、きょう午後三時、此の様に発表されました。

この大本営発表は、1944年1月10日のものである。このあと、ラバウルの日本軍航空部隊はアメリカ軍の猛攻を受け、2月には島から撤退している。新人アナウンサーたちは、とくに潰滅している航空部隊の、数か月も前の一時的な「勝ち戦」を伝えるニュース原稿を使ってアナウンスの訓練に励んでいた。

テキストの欄外には、研修生の1人が書いたと思われる鉛筆書きのメモが残っている。

声ヲ大キクスル

元氣ガナイ

単調ニ過ギル

舌が廻ラナスギル

指導教官から指摘されたことをメモしたのだろう。新人アナウンサーたちは、日本が敗戦に向かつて転がり落ち始めていたこの時期、精神訓話とともに、なお「雄叫び調」をたたき込まれていたのだろうか。

第6回了

（おおもり じゅんろう）

※史料の引用に際しては、旧字を新字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所がある。また、読みやすさを優先して、カタカナをひらがなに改めた場合、句読点やルビを追加した場合もある。

補遺 一もう1つの「雄叫び調」伝説一

本稿では、いわゆる「雄叫び調」は太平洋戦争勃発直後に自然発生的に生まれたとするこれまでの定説が伝説にすぎないことを示したが、ここでは、その伝説と分ちがちがたく結びついた戦後生まれの「雄叫び調」伝説について記しておきたい。

「雄叫び調」は叫ばなかった。にもかかわらず、藤倉修一や浅沼博が、軍人の命令で「馬鹿デカイ声をはり上げ」たり、「腹が減るくらい、大きな声で怒鳴っ」たと戦後に回想していることは、本稿で述べたとおりだ。戦後の視点から戦時ラジオ放送を省みる彼らにとって「雄叫び調」とは、「サーベルの御注文」に応じて実践した「珍妙なアナウンス・スタイル」なのである。

だが、ここには、あの「仕方がなかった史観³⁰⁾」が顔を覗かせてはいないだろうか。自分たちはアナウンスという仕事を通じて戦争に協力した。でもそれは軍の要求であり、仕方がなかったのだ——。

藤倉や浅沼に限ったことではない。『アナウンサーたちの70年』は、NHKアナウンス室有志を中心に編纂されたものだが、そこには志村正順が1943年に書いた次の文章が挙げられている。

参謀本部の某少佐が我々との会合で、冗談だが、こう言われた。大きな太鼓を演奏室へ持ってこい。それをアナウンスの一語一語の切目にドーン、ドーンと叩け、その音に負けない丈の声で喋れ³¹⁾。

これだけを読めば、「雄叫び調」は軍から強制された馬鹿げたアナウンスと思うだろう。だが、『アナウンサーたちの70年』には収録されていないが、実は志村の文章は次のように続くのだ。

我々は一応は笑ったが然し考えた。皇軍の奮戦を見よ。忠勇なる我將兵は目よりも高き敵兵の胸腹に銃剣を突き差してあの赫々の勝利を捷^かち得ているではないか、我等も又皇軍將兵の精神を精神として頑張れば良いのではないか。現に我々は其れを実行に移している³²⁾。

志村は某少佐に半ば同意していた。太鼓の音に負けないように喋ろうとは思わないにしろ、「皇軍將兵の精神」をアナウンサーもまた持たなければならないのであり、それをアナウンスに

生かさなければならぬと言っているのである。

先にも引用したが、志村は戦後の聞き取りで、情報官から「(米英には) 獣偏を付けて読め。そうすれば鬼畜米英っていう感じが出るだろう」と指導された体験を語っている。そして情報官を「嫌な奴」だったと言うのだが、当時はどう受けとめていたのだろうか。「(米英に) 獣偏を付けて読め」とは旨いことを言うなと私なら思う。「目よりも高き敵兵の胸腹に銃剣を突き差」すような「皇軍將兵の精神」をもってするアナウンスとしては、である。

軍の命令で、アナウンサーたちは仕方なく、太鼓の音に負けないように大声を張り上げた。それを「雄叫び調」と言うのなら、それは戦後に生まれたもう1つの「雄叫び調」伝説である。

アナウンサーたちは叫びも怒鳴りもしなかった。しかし、国策の「宣伝者」として国民を1つにして戦争協力に導くため、あるべきアナウンスを模索し続けたのである。その事実が伝説によって見えなくなることがあってはならない。

注：

- 1) 安齋義美「新しい出発のために」『放送』1941年8月号
- 2) 同上
- 3) 中澤道夫「アナウンスの基礎問題」『放送研究』1941年10月号
- 4) 「第一回臨時非常対策委員会開催の件」(1941年10月) NHK放送文化研究所所蔵
- 5) 同上
- 6) 岡本正一「アナウンサー室」『放送研究』1941年11月号
- 7) 開戦の臨時ニュースの音声は、「NHK戦争証言アーカイブス」上で公開されている。(https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/) なお、館野守男は、戦後、遺された音声は午前7時のものではなく、「確か二度目に繰り返し

て放送した時のものである」と記している。
館野守男 (2015)「大本営発表」, 文藝春秋編『太平洋戦争の肉声 I 開戦百日の栄光』(文藝春秋) 所収

- 8) 安齋義美「アナウンス精神の自覚」『放送研究』1942年1月号
- 9) 館野守男「戦時放送とアナウンサー」『放送研究』1942年4月号
- 10) 「放送員室」『放送研究』1942年5月号
- 11) 松隈敬三「放送員再教育報告」『放送研究』1942年8月号
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 「放送員採用試験問題」『放送研究』1942年11月号
- 15) 川名正一「アナウンス」『放送研究』1942年12月号
- 16) 前掲「戦時放送とアナウンサー」
- 17) 情報局は、思想統制の強化を目的として、1940年12月に設立された。情報局情報官は、外務・内務・通信などの各省職員や、陸海軍軍人によって構成されていた。
- 18) NHK放送文化研究所・佐藤喜徳郎による聞き取り(1986年), NHK放送文化研究所所蔵
- 19) 藤倉修一(1952)『マイクとともに』(大日本雄弁会講談社) 75頁
- 20) 浅沼博(1954)「口八丁の三十年」, 春日由三編『アンテナは花ざかり』(鱒書房) 所収
- 21) 例えば、大本営発表「スラバヤ・バタビヤ沖海戦」(1942年3月3日), 「印緬国境アキャブ包围」(1943年4月16日)。これらの録音はレコード化され、NHKが所蔵している。
- 22) 前掲「新しい出発のために」
- 23) 高橋博「アナウンス技術の研究・ニュース」『放送』1940年1月号
- 24) 竹内好(1981)「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」『竹内好全集 第十四巻』(筑摩書房) 295頁

- 25) 伊藤整(1983)『太平洋戦争日記(一)』(新潮社) 59頁
- 26) 館野守男「ニュース放送員養成の問題」『放送研究』1942年12月号
- 27) 川添照男「アナウンス技術の尊重」『放送研究』1943年8月号
- 28) 元橋「放送員室」『放送研究』1943年9月号
- 29) 軍と行動をともにするようになってからの立澤正雄の苦難の日々は、その著書『戦雲に消えたパラオ放送局』(1980年, エイジ出版)に詳しい。再び故国の土を踏んだのは1946年2月17日のことだった。
- 30) 日本放送協会は、はじめから政府が管掌する組織として設立されたのだから、戦争に協力したのは当然であり、仕方がなかった——。そのような見方を筆者は、本シリーズ冒頭で「仕方がなかった史観」と名づけて批判した。『放送研究と調査』2017年8月号
- 31) NHKアナウンサー史編集委員会編(1992)『アナウンサーたちの70年』(講談社) 98頁
- 32) 志村正順「海外放送のアナウンス」『放送研究』1943年2月号

民放

2020 **9**
SEP.

9月発行予定

B5判・70ページ 定価 本体 689円+税

編集・発行 日本民間放送連盟

発売 コーケン出版

〒103-0015 東京都中央区日本橋區船場2-7-9
〒103-0015 東京都中央区日本橋區船場2-7-9
Tel. 03-5261-4789

おうち時間こそ！メディアを読む2020

自分の言葉を獲得し直すための3冊 武田砂鉄

特集 (メディア関連の近刊を編集者が紹介)

「日本のテレビ・ドキュメンタリー」／「改訂版 著作権とは何か」／「五輪と戦後」
「炎上CMでよみとくジェンダー論」／「戦争をいかに語り継ぐか」
「篠原榮太のテレビ・タイトルデザイン」／「ディズニーCEOが実践する10の原則」
「テレビの荒野を歩いた人たち」／「乃木坂46のドラマトルギー」
「平成TVクロニクル」Vol.1~Ⅲ

経営トップに聞く

須磨 直樹(BS12 社長)

単発インタビュー

江川紹子／鈴木涼美／大島新／松本正生／津山恵子
石高健次／臺宏士／入江たのし／豊田拓臣